

忘れられた作家・鶴田知也を読む

～北海道・開拓・アイヌ～

SF 乱学講座 2013.10.06 東條慎生・岡和田晃

はじめに

では、はじめたいと思いますけれど、この講座以前に鶴田知也という人を知っていた人は、どれくらいいらっしゃるでしょうか？ コシャマイン記を読んだことがあったという人は？（「芥川賞ということで、リストで見たことはあります」という声などが上がる） やっぱり少ないですね。

鶴田知也はほんとうに忘れられていて、私もまったく知らなかったわけなんですけれども、二〇〇九年に講談社文芸文庫から作品集が出るまでは、芥川賞全集か古い文学全集でしか読めない作家だったわけです。新しくメジャーな所だとかちくまのシリーズに入っていますね（『新・ちくま文学の森 9 たたかひの記憶』）。それでも「コシャマイン記」一作だけで、文芸文庫は一般流通の作品集としてはじつに四十年ぶりの出版になったわけです。画文集のようなものは色々出ていましたけれど。

しかし、岡和田さんと幻視社（東條が主宰する同人サークル）で向井豊昭特集をやって、北海道、アイヌという問題をおもに文学から興味を持った時に、この作家を知りまして、文芸文庫の作品集を読んでもこれが非常に面白く、そしてこの作家の抱えるジレンマがそこにあることに気づいたんです。

「コシャマイン記」のような作品は「アイヌ」文学、「アイヌ取材文学」と呼ばれるもので、アイヌではないものによるアイヌを題材とした小説です。では、鶴田知也はほかにも「アイヌ」文学を書いているのかというと、文芸文庫のほぼ二作だけといってもいい。戦後、短いものを二つ書いているんですけど、それは最後に話します。つまり戦前にはこの二作しかない。「コシャマイン記」でしか鶴田を知らない人には意外かも知れません。

他に書いているのは、主に北海道農業を主題にした、農民、酪農文学なんですね。鶴田は、

「自分の文学者としての任務の一つを、酪農業の日本的意義の究明と宣伝とにおいて来た」（『北辺の土』「自序」より）

といいます。鶴田知也はのちに農業運動の指導者として活躍するように、かなり初期から北方における農業について深い関心を持っていまして、文学者としてもそうでした。

この農民文学・酪農文学と、アイヌ文学というのは、まあ単に無関係というか、別の方向、というわけにはいかない関係にあります。和人の農民の耕す土地というのは、アイヌから奪ったものなわけですから。日本近代において、国境近くにいる先住民族を強制移住させた挙げ句に集落の多数を死なせてしまった例というのはいろいろあるわけなんですけれど、土地や生業の基盤となる山野のアイヌの利用を禁止して、近代的日本人への同化を強制したわけです。その結果アイヌは貧困におちいる。つまるところ、農民とアイヌというのは北海道における「近代」の表と裏、光と影なわけです。

鶴田は、その双方から北海道近代を描いたということが言えると思います。そして、ここにいろいろ難しい問題があるわけです。作家鶴田知也が北海道をどのように体験し、そしてどのように描いたのか。昭和初期から敗戦までの戦時下の活動を主にたどりながら、鶴田知也と北海道について、話していきたいと思います。

1 プロレタリア作家鶴田知也

・プロレタリア作家になるまで

作品の多くが北海道を舞台にしているんですけど、鶴田は九州出身です。一九〇二年、九州福岡県小倉市で生まれて、その後豊津小学校、豊津中学校を出てます。これ、堺利彦と葉山嘉樹の出た学校なんですね。堺利彦は共産党宣言を日本で幸徳秋水と一緒に初訳した社会主義者で、歴史的にも有名です。また、葉山嘉樹はプロレタリア作家として知られていますね。教科書に「セメント樽の中の手紙」が載っていることがあるみたいで、時々トラウマになった小説、という感じで話題になることがあります。角川から文庫で出ているのが入手しやすいです。葉山はこれは岩波文庫ですけど、『海に生きる人々』という抑圧される船員労働者の長篇を書いていまして、これ、小林多喜二の『蟹工船』の元になった作品なんで、読み比べてみると非常に面白いと思います。

豊津町というのは、小さい町らしいのですが、堺、葉山、鶴田と三人の社会主義者を輩出した町、ということで知られています。鶴田知也研究の第一人者の小正路淑泰さんは、「堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也顕彰会事務局長」という人で、社会思想史の研究をしていらっしゃるそうです。文芸文庫の年譜作成や作品選定を担当しているほか、目録作りもしています。

そして、鶴田の鶴田姓というのは養父の姓で、実の父は高橋というんですね。で、この人の家には、若いころの葉山嘉樹が出入りしていて、父とよくロシア文学とかキリスト教とかの議論をしていたそうです。鶴田の葉山への憧れやなんやらは「わが悪霊」という短篇に出てきます。

こうした環境の影響もあって、キリスト教社会主義にめざめた鶴田は父の伝で、東京の神学社神学校に入学します。この学校の設立者の植村正久という人は日本のプロテスタントに非常に大きな影響を与えた人、ということで、国木田独歩や正宗白鳥の先生だ、ということです。

この学校でいろいろな知り合いができて、その一人に北海道八雲町出身の真野萬穰がいました。この人は戦後に初代民選町長になる人です。八雲町史というのを見てみると、明治の第四次移住者のリストに真野、という人がいて、その子どもだろうと思われます。

鶴田知也は、都築省三という人の『村の創業』という八雲町開拓の様子を描いた著作を読んでおり、これに非常に感銘を受けていたということで、この真野との出会いをきっかけにして、その八雲町に八ヶ月間ほど滞在することになります。この都築、という名前も第二次移住グループに名前がありますね。

そしてこれが後の鶴田の人生を決定する大きな出来事だったわけです。

このとき鶴田は信仰に迷いを感じていた、ということで、回想記で書いてるんですけど、行った先で極寒の環境の中で非常に苦勞をしまして、自然の厳しさから、「自然の絶対性」「自然の支配」ということを自覚したといいます。改心のよう大きな信仰上のショックを受けたんですね。まず自然があるのだ、ということを確認します。

同時に、開拓の歴史を学んだり、農作業をしたり、そこで出てきた友人とよく歩きながら議論をしたりしていたようです。この太田正治、という農業技術員と非

常に親しくなり、長く付き合いがあったということです。文芸文庫を読んだかたなら、織田道広、織田、OMといった人物がいくつかの作品に出て来るのに気づいた方がいるかと思いますが、OMとはつまり太田正治氏のイニシャルで、この人をモデルにした人物でしょう。

そこでまた、ユーラップコタンのイコトルというアイヌの老人に出会い、ほとんど盲目にもかかわらず、魚を鮮やかに獲った、ということで、これが鶴田に鮮烈な印象を与えていて、繰り返しエッセイ等に書いています。

北方農業、自然、信仰、アイヌという鶴田の人生あるいは文学全体に大きな影響を及ぼすものを一挙に体験したわけで、これは非常に鮮烈なものだったろうと思われます。鶴田は八雲を「第二の故郷」と言うのですけれど、それはこういうことです。

そして、鶴田はこのまま九州に帰ってしまうんですね。神学校に戻らなかった。そこで兄弟や後の妻となる野島勝子等とともに、グループを作って活動していたようです。特に福田新生という弟は、この後も挿絵や装丁などで、戦後に至るまでよく一緒に活動していて、更科源蔵の本の表紙絵を描いたり、満洲旅行でのことを書いた本を出したりしていて、北方にはかかわりのある人です。

九州にいる時、あの憧れの葉山嘉樹から誘いが来ます。名古屋での社会主義運動にかかわっている葉山に呼ばれて、名古屋で走り使いをしていた、ということです。しかし、このとき葉山は名古屋共産党事件という一斉検挙で投獄されるんです。この獄中にいた時に書いたのが「淫売婦」や『海に生くる人々』の原型です。出獄後これを発表して、一躍葉山は有名になります。で、鶴田はどうしていたかということ、共産党事件の直前に検挙を感じた葉山によって、九州に用事を言いつかって帰されていたんです。

そして、作家となって活動していた葉山の再度の誘いで、今度は東京に呼ばれて、プロレタリア作家の組織に加盟することになります。一九二七年の夏のことです。このとき、この組織には林房雄や中野重治、評論家の蔵原惟人といった人がいました。鶴田は自分の作品は他のものとは全然毛色が違うので不安だったらしいのですけれど、編集会議を異議なくパスして、誌面に載ることになりました。

・「文芸戦線」デビュー

そして、「文芸戦線」というプロレタリア文学雑誌の一九二七年十一月号に載っ

た「子守娘が紳士を殴った」という短篇でプロレタリア作家としてデビューします。

ここで、ごく簡単にプロレタリア文学の解説をしておきます。プロレタリア文学の歴史は面倒臭くて、同じ組織から分裂したり分派組織が合同したり、論争が激しくなって殴り合いの喧嘩になったりといろいろ複雑で、固有名詞も多くなるので、すごく簡単にまとめます。

まず、プロレタリア文学といいますけれど、プロレタリアは労働者、ということで、辞書的には、労働者階級の自覚に基づいて、その現実を書いたもの、というのがあります。これは別に労働者が書いた文学、というだけではなくて、社会主義、共産主義の立場から書いたものも含めたものです。これは外国では革命文学、と呼ばれていたようです。分かりやすいですね。ですけれど、当時の日本で表記しようとする「革命」は伏字になっちゃうんです。伏字は×になるんで、××文学、となる。××文学はないだろう、ということでプロレタリア文学というのが定着した、と小田切秀雄が言ってます。

プロレタリア文学運動は大正時代の「種蒔く人」、というのが代表的で、それは関東大震災で大杉栄の虐殺のような弾圧があって、一端運動がしぼんでしまうんですけれど、一九二四年に後を継いだ「文芸戦線」がスタートします。これに葉山嘉樹が参加し、葉山が鶴田を呼んだ、ということになります。

この文芸戦線まわりにはいろいろあって、もともとプロ芸（プロレタリア芸術連盟）というところがバックにいたんですけど、この組織で意見対立が目立って、排除される人たちが出て、脱退組は労芸（労農芸術家連盟）という組織を作って「文芸戦線」ごと持っていってしまうんですね。またそこでも、論争と殴り合いの結果、労芸が分裂して、前芸（前衛芸術家連盟）ができる。三つに分裂しています。

鶴田はこのうち、労芸という「文芸戦線」を出しているグループに居て、ここにずっと残り続けます。

鶴田に戻ります。デビュー作は、死にそうになっている妾の子守をしている娘が、妾を軽視する資本家の態度に憤って殴りかかる、という話です。資本家と下層労働者の対立を書いた、というと単純すぎますけれど、これは北海道を舞台にしたもので、以降も鶴田は北海道の農村を舞台にしたものか、あるいは都市部でのオ

ルグ活動を書いたもの、というのを多く書いていくようになります。

オルグものには過度に文学的にしようとして失敗していると思えないもの、あるいは前篇しか書かれていないものがあつたりします。ただ、オルグに行った工場で勧誘をしようと声を掛けたら、そこで働いている人がほとんどみな家族だったことに気づいて逃げ帰る、というコメディタッチの短篇がわりと面白かったです。後で回想記を読むと、これ鶴田の実体験だったらしいんですね。

そしてこの時期に、アイヌ語の地名を冠した短篇の第一号が書かれています。「ユーラップ河の秋」というものがそれで、ユーラップはもちろん、コシヤミン記を読んだ人なら御存知の地名で、八雲町を流れる川の名前です。この短篇は、男女の駆け落ちを丁寧な自然描写にあわせて書いた抒情的な作品で、なかなかいいと思います。駆け落ちする理由は、女性の父親が娘を金持ちに嫁がせようとしているからで、こちらへんやっぱりプロレタリア文学です。

プロレタリア文壇から注目された作品があります。「海鳴り」という三つ目の作品です。北海道の農村を舞台にしている、不作で困っている農民たちの行動に対して、農場側がだましうちのように罠にはめて検挙するんです。そしてその抗議のために農民たちが集まっているところへ、海鳴りが聞こえてきて、その音に、革命への進撃を聞き取る、というラストが印象的に書かれた作品です。これを当時蔵原惟人という評論家が高く評価していて、浮浪者や下層労働者の生活をよく知っていて描写もいい、と言っています。ただ、農民の描写はもうちょっと、と苦言も言っています。

川西政明の大著『昭和文学史』にはこの作品への言及があるんですけど、これは蔵原が高く評価したから、なのかな、と思います。同時代にこうした評価がなされると後になっても忘れられたままになる、ということでしょうか。

これから農村ものが三作続いていて、それはこの苦言を意識してのことかな、と思います。そのなかで初期作品でもっとも重要だと私が考えている短篇が書かれます。「闇の怒」という短篇です。

この「闇の怒」や「海鳴り」など、初期プロレタリア作家時代の代表作は新日本出版社の『プロレタリア文学集 1 1 文芸戦線作家集 (二)』という本に入っています。

・「闇の怒」と連帯の幻

初期作品に限らず、鶴田作品全般を見ても、代表的なものだと思うんですけど、ほとんど論じられていません。というか、鶴田の作品である程度論じられているのは「コシャマイン記」以外にはほとんどないんですけども。

この「闇の怒」はやはり北海道農村、アイヌ語の名前が付いた村、と書かれていますね。そこの農場主とその下男を主要人物として扱っています。農場主の湯浅という男は、生活のイライラから、町にいる「新しい情婦」、不倫相手ですね、彼女に会いたい一心で、下男の平太に急いで櫓を出すように言いつけます。しかし、夜も遅くて吹雪になりそうなので、平太は渋るんですけど、怒鳴りつけて無理矢理ださせるんです。

で、出発してしばらくすると案の定天気が悪くなって、湯浅は自分の無謀さを後悔しはじめます。その時、昔、熊を狩った時のことを思い出しています。その下りを読みます。

「彼は、その時眼の腐ったアイヌのイコトルから、熊の穴倉の前で、定められた持場を動き銃を構えずに居たと云うので怒鳴りつけられたのだ。日本人に対しては犬より従順であったアイヌに、いきなりアイヌ語で最も甚だしい種類の罵言を以て怒りつけられたのだ。この『侮辱』を彼は生涯忘れることはあるまい。しかも彼には、この時『劣悪な眼の腐った種族』に対して何が能きただろう。顔を真赧にしたきりだ。彼はイコトルのその犯し難い権威に完全に圧倒されたのであった！」

これは、名前が鶴田が実際に出会ったユーラップのアイヌと同じですね。八雲の経験をここに使っているのがわかると思います。

湯浅は、その熊狩りの時と同じように、自力で馬櫓をひけない自分はいま、下男に命を握られていることに気づいて愕然とします。この環境では自分はまったく平太に対して優位に立てていない、ということに気づきます。このとき、熊狩りの場でイコトルに圧倒されたように、吹雪の雪原で平太に圧倒されている自分に気づくわけですね。

平太は逆に、こんな苦境の中で唯一の同行者にとっても親密さを感じてくる、というのがとても皮肉です。さらに、ここで平太はその日の朝、農民たちから苦境を聞かされ、農場主の湯浅に、小作料の免除を頼んで欲しいという話を思い出して、

それを湯浅に持ち出すんです。

平太は親しみからこの話を持ち出すんですけど、このとき湯浅は平太を脅威としてみているわけですから、この頼みは完全に脅迫に映っているんです。それを想定できなかった平太の素朴さが強調されています。そして、この脅迫をまえにして、湯浅はいったんその頼みを全面的に受け入れるんですね。平太は大喜びです。そしてようやく町に着いた時、平太は祝杯を挙げに酒場で酒を飲むんですけど、そこに警官がやってきて、ごろつきとして平太は逮捕されてしまいます。騙し討ちにされてあっさり裏切られるんですね。

この短篇、自然の中での自分の無力さを思い知らされるとか、そこで人間などを「無視している神」を見出すくだりなんかは、先に言った北海道の経験が詰め込まれているのがわかると思います。

そして、アイヌの登場がとても重要です。アイヌのイコトルは、狩猟の場では湯浅の権威やらを圧倒して一喝する存在で、平太もそうです。資本家の権力が何の役にも立たない状況を描いていて、さらに、アイヌと和人という抑圧の構図も重ねられています。裏切りに終わってしまうのですが、ここでは資本家の権威がアイヌと下男という下層におかれているものからそれを転覆する一瞬が書かれています。

北海道体験を一挙に詰め込んだような短篇で、鶴田知也作品として、初期に限らず鶴田の代表作だと思うのはそういう理由です。

・プロ文運動解体期

で、もう一度プロレタリア文学の歴史の話に戻ります。これは後々重要なので、まあ面倒な話ですけど簡単にすませるので聞いておいて下さい。

この頃、三・一五事件という左翼運動の大弾圧事件があります。多喜二が作品を書いていることで知ってる方もいるかと思います。これをきっかけにして分裂していた組織が合同し、中野重治がいるナップという組織が結成されます。これは共産党系で、鶴田は社会主義系です。そしてナップは「戦旗」という雑誌を出して、ここから小林多喜二や徳永直といったいまも有名な作家が出て、プロレタリア文学としてはこちらが主導権を握るようになります。

面白いのは、鶴田はこの戦旗派を指して、連中はインテリだから将棋なんかやらないでしょうね。と言っていることです。鶴田は戦後将棋の有段者になるんですけど、文芸戦線の人たちは労働者出身で将棋好きが多い、と言っています。インテリは将棋をやらない、という時代だったんですね。

で、この時代は左翼大弾圧があり、一九三三年に小林多喜二が虐殺されるわけです。共産党のトップが転向したと言うことが新聞で大々的に報道されたりして、左翼運動は退潮を余儀なくされていく時代です。こういう空気の中で、「文芸戦線」も内紛を起しながら縮小して行って、雑誌の名前を変えながらも一九三四年に終わりを迎えます。戦旗のナップの方も自主解散を余儀なくされて、この年あたりがプロレタリア文学運動の終焉、というのが文学史的な言い方になります。

この時期の鶴田の作品には、「或る農夫の話」という作品があります。戦争から酔っぱらって凱旋して帰って来たら不作と貧乏の中で大事な家畜を売り払わざるを得なくなっていたことを知る、という話で、百姓を飢え死にさせる世の中に怒りを燃やす反戦・反軍国主義小説です。これは、社会主義政党の多くが満州事変以降に、中国侵略を公然と認めるようになった時期に発表されたものだ、という指摘があります。

もう一つ重要なのは、文庫にも載っている一九三三年の「ペンケル物語」です。アイヌを主人公にして、過去を舞台にした作品で、鶴田の叙事詩的文体のものとしては第一号です。熊の害に苦しんでいるのに、部落同士が対立していて、いっこうに団結できない、というそういう内紛の話になっています。鶴田研究の第一人者というべき小正路淑泰さんは、近文アイヌ給与地問題でのアイヌたちをモデルにして、彼等に助太刀した作品だという指摘をしています。近文問題では、全土地所有権の獲得を目指す財団派と、北海道庁の一町歩付与案に同調する穏健派とが対立していたということで、ペンケルの若者たちを財団派、邪魔をする老人たちを富裕層の穏健派、そして熊は強権の日本人、という構図にしたのではないかということです。

この作品はキロロアンが出て来る、コシャマイン記の前日譚でもありますね。「レフト」という「文芸戦線」の後継誌に載ったものです。

この「レフト」には「シナリオ これが東京だ」という映画用脚本も載ったことがあります。鶴田が監督して映画を撮ろうという企画があったらしいことが分かります。この映画が実際に撮られたかどうかは不明です。内容は、故郷

から出てきた青年が東京で失業問題の運動にかかわりながら、自分の「部署」は故郷だ、と気づいて帰るまで、というものです。

2 戦時下の芸術

ここでいよいよ「コシャマイン記」の話になります。「レフト」、「新文戦」と続いた文芸戦線系列の雑誌が途絶え、仕事を失った鶴田知也は、伊藤永之介という作家と一緒に新しい同人誌を作ります。

この伊藤永之介という人は、文芸戦線時代からの鶴田の友人で、この時期は二つの家族同士で一緒に暮らしていたらしいです。これ以降も友人関係がつづいていて、後に秋田に疎開するんですけれども、それも一緒です。戦後も同じ文学団体にいたり、よく一緒に雑誌に書いていて、家族ぐるみで非常に親しくつきあいのあったことがわかります。伊藤も農民文学でわりと知られた作家ですね。戦後もいろいろ活動していて、鶴田知也より知名度がある作家ではないでしょうか。

そして、彼等の作った「小説」という雑誌に、コシャマイン記が発表されます。一九三五年二月といえば二・二六事件の時ですね。熊谷孝という評論家がいまして、こうっています。

「私は実感するのだが、この作品は、二・二六事件から翌年本格的な形で開始される日中戦争へかけての、この時期に固有の重苦しい空気の中で読むのでなければ感動の質がまるで変わってしまう、という性質の作品のような気がしてならない」（熊谷孝『現代文学にみる日本人の自画像』三省堂、一九七一年）

過去を舞台にしたアイヌを主人公とする作品にもかかわらず、こうした感想があり、これはまた非常に的確だとも思うわけです。後にまた触れますけれど、コシャマイン記を読んだ方は、ある程度理解できる感想ではないでしょうか。

コシャマイン記はここで、意外な展開をたどります。林房雄という作家がいまして、この人はもと文芸戦線のプロレタリア作家だったわけなんですけれど、共産党とのかかわりから治安維持法で逮捕されて、転向するんですね。その後小林秀雄、川端康成、宇野浩二なんかと「文学界」という同人誌を立ち上げます。余談ですけど、この雑誌は石川淳の「マルスの歌」という発禁になった短篇が載った雑誌で、この時の罰金を菊池寛が肩代わりしたことが縁になって、文藝春秋が発行

することになった、という由来があるということです。

それはいいとして、この林房雄が菊池寛にこのコシャマイン記を推薦するわけです。転向作家があいだに入って、プロレタリア作家と文藝春秋がつながるんですから面白いですね。ここで、発表から半年ほどたって、「コシャマイン記」は第三回芥川賞を受賞するわけです。小田嶽夫という人と同時受賞で、第二回の芥川賞は二・二六事件で審査中止なので、そろって二人目の受賞者、ということになります。

菊池寛はとくに高く評価していて、受賞しなくても文藝春秋に転載するつもりだった、とか、映画にする時は自分にも協力させて欲しいといったような手紙を鶴田に送っています。この受賞について、鶴田は文藝春秋あたりと敵対する「社会主義文学集団」にいたという鶴田にとって非常に意外なことだったということを書いています。さっきオルグに行った先が全員家族だった、というコメディ短篇「インテリゲンチャ」のことを話しましたが、この中には、菊池寛の本を職場に持ってくるヤツなんぞはろくな代物ではない、という台詞があって、鶴田もばつが悪かったんじゃないでしょうか。

・文体と地理

さて、作品に入ります。まずこの作品は、冒頭にあるように、巫女の語った神謡だという導入で語られます。しかし、かといってこの作品がアイヌ神謡の形式を借りている、というわけではありません。鶴田もこの点に関して、書く時にはアイヌ神謡を参考にしたわけではない、といい、金田一京助もアイヌのユーカラに似ていない、という風に言います。韻文ではないですし、アイヌの英雄叙事詩はもっと超常能力や戦いの連続だったりするそうで、内容としても異なります。

文体についての指摘としては、文語体の聖書の影響、というのが当たっているのではないかと思います。鶴田自身も「旧約聖書の紀伝」の影響を言います。聖書やホメロスについて、単純さと簡潔さがきわめて美しい、という風に言っていて、聖書にならって、ある人物の生涯を語るのに適した形だという風に考えたのでしょう。また、現代小説のように細かく描写するほどの材料がないので、こうなった、という消極的な理由も鶴田は挙げています。

「コシャマイン記」と言いますが、作中にも書かれている通り、このコシャマインは一四五七年のコシャマインの戦いの英雄にちなんでつけられた名前なんです。他にもシャクシャイン、オニヒシが出てきます。最初私はこれもフィク

ションとして読んでいたのですけれど、これたぶん史実の戦いを指しているんじゃないかという指摘があります。冒頭に出て来る、ヘナウケ、タリコナも史実のアイヌの名らしく、かなりの程度史実を参照しているらしいです。とすると、今作の歴史的年代はかなり正確に確定できます。十七世紀中葉、というあたりです。

また、これがなぜ「コシャマイン」なのか、というのも疑問といえば疑問でした。反乱のアイヌの名というなら、シャクシャイン、クナシリメナシのツキノエ、イコトイ、ションコ等といろいろいるわけで、また、ヘナウケ、タリコナというマイナーどころもいるわけです。ただ、これは私が北海道地名に疎かったから疑問に思っただけで、作中に出て来る地名がわかれば、疑問に思うまでもないものなんです。

最初に出て来るセタナ、というのは北海道の取っ手ともいうべき、渡島半島の日本海側にある部落で、北上して岩内、倶知安を通して、洞爺湖北岸でコシャマインの成長をまって、内浦湾から八雲へという行程をたどるわけです。おおむね札幌から西側ですね。渡島半島が舞台で、これは史実のコシャマインの戦いの範囲とかぶるんです。コシャマインがこの地方で英雄として伝えられていた、というのは適切な舞台設定といえるでしょう。シャクシャインの戦いは日高地方で、クナシリメナシは文字通りクナシリですから、八雲町を舞台にすることが念頭にあるなら、これはコシャマインでなくてはならないわけです。もうひとつ、松前藩の始祖、のちに蠣崎氏となる武田信広がコシャマインの戦いで鎮圧したことを、北海道植民地化の始まりを見た、という可能性も考えられます。そして、「記」というのは聖書のネーミングですね。

・歴史的背景

さっきから何度かプロレタリア文学の歴史をかんたんにたどってみましたけれど、ようやくその話になります。熊谷孝の二・二六事件と関連づけた指摘もそうですね。この作品にかんしては、この当時の時代背景というのは非常に重要だと考えています。

結局、コシャマイン記というのは、抑圧されたアイヌの蜂起は、和人の武力と経済的な懐柔策によって、同族達の意志が分断されて、内紛によって蜂起が挫折する話なんですね。銃の威力と協力を得られなかった挫折があるわけです。

これって、アイヌと和人を、プロレタリア作家たちと国家権力と置き換えると、このころまでに左翼運動がたどった歴史そのままと言えるのではないでしょう

か。プロレタリア文学団体の度重なる分裂と内紛は、つねに伏字や弾圧のもとにあった状況と裏表の関係にあるわけです。文芸戦線系列の雑誌が途絶えた後、自分達で立ち上げた同人誌に発表したのがコシャマイン記、という流れを見るに、この作品が、アイヌと和人との関係に、自分達の運動の挫折を重ねて書かれた作品だというのは間違いない所だと思うわけです。

歴史小説ながらも、露骨なまでにプロレタリア文学なのがコシャマイン記だろうと言えるのではないかと。

ですけど、この作品は発表当初非常な不評に遭うんですね。「同人会の総攻撃を受けた」、と鶴田は述べていますし、一緒に同人誌を立ち上げた伊藤永之介に酷評されたんです。小正路さんは、鶴田のコシャマイン記の最初の同時代評はこの伊藤永之介によるものだと言って、「小説」誌の次の号で、伊藤永之介は、

「こんなけだるい絵空事を興がっている作者の気持ちを不審がるのは私だけだろうか」

と書いているんです。ひどいもんですね、全面否定に近い。これはやはりまったく表面的にはプロレタリア文学的ではないから、なんでしょうか。この批判には、SFやファンタジー、幻想文学等に投げかけられるものと同じものを感じますね。

同じ陣営からは酷評されたのに、菊池寛に大好評だった、というのは面白い話です。菊池寛は、芥川賞の選考が偏っている、というような批判に対しては、

「プロレタリア文学の傑作のためには、小林多喜二賞といったようなものが創設されてよいのである」

と答えていて、プロレタリア文学はプロレタリア文学でやればいいじゃないかみたいなことを言ったのに、プロレタリア文学界隈で酷評されたコシャマイン記が菊池寛に評価されたというのは本当に皮肉というか面白い状況ですね。菊池に推薦したのも元プロレタリア作家の林房雄ですから。菊池寛は歴史小説も書いていて、この手のリアリズム一辺倒でない作風に拒否感がないのでしょうか。

で、今週追加調査というか、国会図書館で日本の文芸時評を集めまくったゆまに書房の『文芸時評大系』という全集を調べてみました。同時代評を探すのをどうすればいいのか分からなかったのですが、これがあるということを知って、

まず索引を見てみたら、数十件言及がある。やはり芥川賞を獲った、ということで多くの人に言及されていて、概ね高い評価なんですけれど、やはりというか、この作品形式には賛否があって、伊藤整や山室静のように表面的なものではないのか、という批判が結構あります。

「コシャミン記」のプロレタリア文学的、左翼的含意というのがどうも理解されていないと思ってきたのですが、やはりそれを指摘している人がいました。明確に指摘している人はしかただ一名だけで、勝本清一郎というプロレタリア文学運動に関わった評論家です。コシャミン記を非常に高く評価、というか歴史的傑作だと大絶賛しているんですね。

「北方の未開民族を資本主義の発展過程が押し倒してゆく姿をしっかりと捉えて彫刻した作品」

として指摘していて、これは正しい指摘だと思います。ただ、絶賛しすぎて他の人に同じ陣営による最良の引き倒しだと非難されたりしています。もう一人、作者の何者かを知れば、と書いている人が一名。プロレタリア文学的な背景があることを匂わせています。

否定的評価もあるのですが、凄かったのは保田與重郎です。時評で否定的に触れているのですが、「露骨な野蛮の亡ぶ運命を淡々と叙しすぎている」と言います。露骨な野蛮、まあ当時はアイヌをこう考える人もいるでしょう。さらに、

「我々の歴史と文化とに関係のない生物学的範疇のものである」、「敗残者が旧世界的生物であるゆえにこれはもっと生物学的に精密にかかれる必要があった」

といっていて、これは凄まじい差別的認識が露わになっているように思えます。文化的な対象たりえない、劣等種には生物学的アプローチがふさわしい、ということですよこれは。さすがになんかゲームのボスキャラみたいな言動でびっくりしました。

・文学史的評価

北海道の文学では、やはり当然アイヌが描かれることがあるわけで、そうしたものの先駆的作品に、幸田露伴の「雪紛々」という長篇と、宮本百合子の「風に乗って来るコロポックル」という短篇があります。じつは両方ともネットで公開されています。宮本のものは青空文庫にあるのでいつでも読めます。ただ、幸田露伴のものは初版本が国会図書館のデジタル化資料あるいは近代デジタルライブラ

リーで公開されているんですけど、画質が悪すぎて事実上読めません。露伴全集で読みましょう。これ、序盤を露伴が書いて、後を弟子が続きを書いて長篇にしたものです。宮本百合子の作品は、大正時代に書かれたのに、発表されたのは戦後ですし、露伴のものも中断して代作したものだったわけで、このことから、和田謹吾という研究者は、「コシャマイン記」を、

「アイヌ問題を的確に捉え描いて世評を集めた最初の作とも言えるし、時期としてもまさに現われるべくして現われたと云うことが出来よう」（和田謹吾『風土のなかの文学』北書房、一九五六年）と評価しています。

露伴の「雪紛々」は、文語体で和人に抑圧されるシャクシャインたちアイヌを描いた作品で、彼等の心情に寄り添って反乱を書いたということで、コシャマイン記と共通点も多いのですが、やはり時代的なこともあって、同化主義の枠を離れてはいません。植民地化への疑問がなく、アイヌがひどいめに合っているのは悪い役人が悪いのであって、それは松前の殿や江戸の将軍、天皇の御心ではない、という観点なんですね。これは露伴と鶴田で一線を画す部分です。天皇について、じつはコシャマイン記、冒頭で出てきています。ここで、巫女が天子さまからもらった金の盃を自慢するような書き方がされているのは非常に特徴的で、これは明らかに懐柔された巫女の末路、が一番最初に置かれて、作品全体を予告しているわけです。この書き方は明らかに「天子」さまを頂く日本の植民地化への批判的態度と言えます。

宮本百合子のものも、老いたアイヌの養子として育てられた和人の子供が女遊びを覚えて、金の無心がきわまって土地すら売り払わせた挙げ句に家を出て行ってしまふ、という散々な目にあったアイヌの老人が、コロポックルの幻を見る、という話で、アイヌが和人にいいように扱われる、という関係を描いてはいますけれど、老いたアイヌの悲哀、というのが主軸ですね。

これらに比べて、コシャマイン記では、和人による植民地主義そのもののへの批判が強烈に表に出ています。これが画期的だった、といえるでしょう。

面白いのは、鶴田はコシャマイン記をリライトして、児童版を書いているんです。しかも、内容についてはほとんど変えていなくて、表現をわかりやすくして、説明を加えたかたちでのリライトになっています。そして、この児童版を、上笙一郎、という児童文学研究者が高く評価しています。

この人は、「植民地児童文学史稿」という連載をもう五年くらい続けていて、日本の植民地で書かれた児童文学というのを非常に幅広く集めて論評しているんです。これがとても興味深いというか、凄い所を掘っていくなあ、という試みで、こういう困難な試みは是非とも応援したい、と思って本論でも引用して、ブックガイドの方でも紹介しました。そこでは北海道を舞台にした作品を色々紹介しながら、児童コシャメイン記を、

「内国植民地における日本勢力とアイヌ族の矛盾に触れた最初作品」

として位置づけていて、その後、この試みに続くものがまったく出なかったということを描いています。アイヌと植民地主義、という観点からは、一般的な文学でも、児童文学でも、コシャメイン記の位置は非常に重要だという指摘がすでになされているということが分かるかと思います。

この観点から、「コシャメイン記」を北海道文学の重要な作品として位置づける、というのはよくあって、北海道文学評論の本ではちゃんと項目が立てられていることも多いです。ただ、道外作家のためか、あんまり重要視されていないんじゃないかと。これは岡和田さんに訊いた方がいいかな。そう、高澤秀次の「北の文学誌」という連載を岡和田さんが発掘してくれましたけれど、これにも出なかったですね。

・植民地主義批判というアキレス腱

そうした評論等での鶴田についての言及っていうのは、たいがい鶴田の作家活動にはあまり注目していません。「コシャメイン記」が採録された文学全集での解説などにもおおむね目を通しましたがけれど、今は何をしているのかよくわからない、というような感じだったりします。作品は知られていても、作家としてはほとんど注目されていないんです。コシャメイン記以外の作品について、誰も知らないんじゃないか、というのは一般的な文芸評論の世界でもそうです。「闇の怒」はそれが再録されたプロレタリア文学集の解説以外ではほぼ言及されていません。

だから、鶴田知也がアイヌを通して植民地主義批判を行う、ということが鶴田自身にとっていかなる意味を持ったのかということはほとんど問われていない。「コシャメイン記」論はしばしばあっても、鶴田知也論はほぼない。戦後活動について小正路さんがまとめたものと、多岐祐介氏による評論、あと文芸文庫の解説、程度ではないでしょうか。

こういう面でのアプローチというのが非常に不足しています。その意味で文芸文庫の解説で川村さんが書いているのは非常に参考になって、私の論文やこの発表はおおむね、その方針をさらに調査することで固めていくようなものではありません。北方農業と植民地主義批判の矛盾、という。川村解説では、『北方の道』や『ハッタラはわが故郷』程度しか、他作品にふれていなくて、正直物足りないところもあったからというのがありますね。

話を戻して、鶴田は戦後に、こういうことを言っています。

「作品を通じての私の主張は、当時満洲侵略時代のこととて異民族に対する日本民族の態度について大いに反省しなければならんという点にあった。そんなわけで内務省では検えつ官八名とかが赤鉛筆をもって入念な検えつをやったという（後にその一人が私に教えてくれた）が何所も引っかからなかった。尻尾をおさえられぬだけの手はぬかりなくうってあったからだ。」

ここでは、コシャマイン記の含意は、膨張政策のもとでの異民族蔑視の批判にあったというわけで、それを日本の過去の植民地拡大の歴史を用いて、間接的に批判する、ということをやっている。直接言えないので、過去の話を経材にする、という検閲逃れの一手法としてあった、と。じじつ、コシャマイン記には、アイヌを迫害する日本人が直接には出てきません。コシャマインが会うのは、懐柔されたアイヌか、和人でも労働者などに限られています。

「ペンケル物語」、「コシャマイン記」ともう一つ、鶴田の叙事詩的文体の作品に、「メシュラム記」というものがあります。これは古代ローマ、イエスの時代を舞台にしたもので、叙事詩的文体の原型たる聖書の時代に材を取って描いた力作です。反ローマ武装闘争グループの熱心党の指導者、メシュラムを主人公にした作品で、一般に捕えられたイエスの代わりに釈放されたバラバ、という人物がいますけれど、この人物をこのゼロテのメンバーだったとして、彼の裏切りが、メシュラムらの武装蜂起を挫折させる、という筋書きの作品です。

鶴田の叙事詩的文体の作品というのは、すべて抵抗と闘争をモチーフにしながら、それが内紛と裏切りによって挫折する、という筋書きになっているんですね。鶴田自身は、

「事実上存在しなかったが存在し得べき人物を特定の時代的かんきょうの中に仮想してみるという実験」

によって書いたものだと言っています。こうした、仮想と実験によって、別の可能性を探ることで、戦時下に於ける抵抗と闘争を試みていた、というのがこれらの作品群だろうといえます。

そして、この叙事詩的文体という特異な形式と主題の選択、それ自体に当時の文学と政治の状況に対するアンチテーゼだったろうと思うわけです。盟友にはけだるい空想と見られてしまいましたけれども、きわめて鋭い批判的態度だと思います。この仮想と実験、というとまるでSFみたいですし、コシャマイン記それ自体が英雄が英雄になれなかった挫折の物語、としてアンチ・ヒロイック・ファンタジーとも呼べるんじゃないかと思っています。ファンタジー読者にはなにがしか面白く読めるのではないかと思います。

・裏切り者たち

そして、当時の中国侵略の批判を意図してたとしても、これは日本の過去の植民地主義への批判ともなっていて、コシャマイン記は日本の北海道開拓の歴史をアイヌの目線から見ることで、それを懐柔と裏切りの歴史として裏返すわけです。第二章の注に「**松前藩のアイヌ民族鎮圧は欺し討ちに終始している**」とあるように、日本は一貫して卑怯な裏切り者、なんですね。それはコシャマイン記に出てきた下層労働者ですら、そうなんです。

これはプロレタリア作家鶴田知也にとってきわめて痛みを伴う作品だったはずです。デビューからずっと、彼は北海道農民や下層労働者という視点から、資本家や社会の問題を批判してきたわけで、その土台を自分で揺るがしているわけですから。

多岐祐介という評論家が、これを「階級的連帯という観念に対する疑問」(多岐祐介『文学の旧街道』旺社社、二〇〇二年)として指摘しているのもそういうことです。自己矛盾、自己批判がどうしても感じられる。

コシャマイン記のラストでは、死んだコシャマインが川を流されて行って、その水から出た頭をカラスやネズミがついばんで、食い尽くしてしまった、という陰惨なラストになっています。これはペンケル物語の「今や(蝦夷地(アイヌモシリ))^{アイヌモシリ}
一帯の一切のものが全く(日本人(シャモ))^{シャモ}のものとなったからである」という最後の一文と共鳴するもので、明らかにアイヌモシリをその手に収めて行って開拓経営にいそしむ日本人を象徴したシーンではないかと思います。

開拓の英雄が死肉漁りのネズミやカラスに当てはめられているわけで、鶴田の作家活動を追っていけば、このシーンはきわめてショッキングな場面と読めます。自身の作家活動を根底からひっくり返すようにも見えるわけです。

しかし、この大きな転換について、鶴田は後にこの方向を深めることもできませんでした。満洲侵略や植民地主義がどうしても問題になる以上、これ以降その問題に深入りすることは出来ないわけです。川村湊は解説でこう書いています。

「帝国主義的な版図拡大を目論む大日本帝国の支配権力と、真っ向からぶつからざるをえなかったからであり、それは小林多喜二のような自爆的な死の覚悟なしにはなしえなかった」

権力に虐殺された小林多喜二の「自爆的な死」を横目に見ながら、鶴田はこれ以降、自分自身の文学的蓄積を否定するような「自爆」を選んでいくこととなります。

しかし、気になるのはこれが当時どう読まれていたか、ということです。私が今まで喋ったような歴史的背景はむしろ当時の人こそ実感としてあったわけですが、コシャマイン記の異民族侵略への批判や、日本の過去の歴史の批判といったようなことについて触れている人はほとんどいないんです。当時の同時代評をある程度探しては見ましたが、こういうことに触れている人は見つかりませんでした。

芥川賞の選評でもそういうものではなくて、室生犀星が

「何か、むくつけき抵抗しがたいものに抵抗しているあたり、文明と野蛮とのいみじい辛辣な批判がある」

といっているのが唯一です。「この抵抗しがたいものに抵抗している」、という指摘はきわめて適切なだけに、分かっているけれども書いていない、ということなのだろうかと思われます。

・山岳を往く部隊

この時期にはもうひとつ注目すべき作品があります。「闇の怒」と「コシャマイン記」は極限状況におかれた人間同士の共感や連帯の可能性が一瞬夢見られて、それが無惨に裏切られる、というパターンなんですけれど、このパターンを使いながら、戦時体制への批判を試みた作品があります。

一九三八年の「山岳を往く部隊」というのがそれです。日中戦争開戦から一年、その日中戦争を舞台にした作品です。新時代社の『鶴田知也作品集』で読めます。

ある谷間で日本軍と蒋介石の中国軍とがにらみ合っているという状況から始まります。補給がままならず、谷底の泉を両軍が欲しがっている、というなかで、主人公の医者は、午前中はこっちが汲むから、午後はそっちで汲め、という相談は出来ないか、といって軍人の失笑を買います。

日本軍は夜に崖を降りて行って水を汲む作戦を実行して成功させるんですけど、二回目には露見して銃撃戦になります。その時に出た死体を回収するために、中国側は丸腰の男たちを下ろすんですけど、その時、死者に手向ける花を採りに行った男が、死体回収が終わった途端に中国側から撃たれてしまいます。その男を止めに行こうとしていた主人公は銃撃を避けた拍子に崖から落ちそうになります。しかし、敵から見えている状況なので、銃に当たって死んだ真似をしながら、日没を待つことになります。

この間、医師は、戦地で俳句を作る軍人や、死者に花を手向けること、あるいは兵力を損耗しても美術を守る、といった日本軍の美談を持ち上げながら、こう考えます。

「『それが戦争というものだ』との観念は無制限に亘るものではなかろう。戦争が主体的である今日の世界でも、こうして戦争そのものの最前線に於いてさえ、主体的な戦争なるものの中に、『平常』が存在するのだ。

(中略)

戦場は一つの強烈な社会だ。それが強烈なのは、簡明直截な方向を持っているからだ。『平常』を圧倒するからだ。しかも尚、その方向中にある、『平常』を輝かしめる、汪洋たる精神は崇むべきかな！」

自軍の風流を持ち上げて、中国軍の裏切りを描写しつつも、戦時下の論理に対して、『平常』の論理を批判的に持ち込むわけです。冒頭で、睨み合いの両軍での話し合いを主張して失笑を買ったエピソードがあったように、戦時の論理一辺倒になることへの抵抗があるわけです。

それともう一つきわめて興味深いのは、この作品は戦時下の芸術を評価するわけですけど、これは同時に戦時下の文学者鶴田知也自身を思わせる所があります。そして、そう考えると、花を取りに行つて殺された男を横目に見ながら、敵の攻撃に直面して「死んだ真似」で日没まで耐えながら、「俺は卑怯だったろうか？」と自問自答する軍医の存在はとても興味深いものに見えてきます。

これはつまり、戦時下において作家鶴田知也の自分自身についての言及として読むことが出来るのではないかとことです。これは完全に私の想像なんですけれど、権力に虐殺された多喜二と、検閲に対応しながら書き続けていく鶴田自身との関係がここに描かれているのではないかと思えるのです。そのことへのなんらかの「悔い」がここに書かれている、と。

「コシャマイン記」の後半の展開は、英雄になれなかった男の挫折ともいえるものでした。そして「コシャマイン記」も「弦のない弓」つまり銃が大きな衝撃をコシャマインに与えています。「山岳を往く部隊」と「コシャマイン記」は、どちらも、銃という形で現された権力という脅威に屈した鶴田自身を描いたもの、とも考えられるのではないかと。

多喜二は自分の意志を貫いた「自爆的な死」を迎えて文学史に大きく刻まれたわけですが、鶴田知也は「死んだ真似」をしながら、火野葦平を芥川賞に推挙した、というようなエピソードでかろうじて片隅に名前が残っています。しかし、凡人の私たちにとって共感してしまうのは、死んだ真似をして生き残る鶴田知也の方ではないかと思うわけです。死を覚悟して書き続け、活動が続けるといふ英雄的行為をだれもができるわけではないわけです。戦時下では、空気や権力、暴力の中で、誰もが自分自身を少しずつ裏切り続けていくしかない。

多岐祐介はさっき引用したように、「コシャマイン記」に「階級的連帯への疑問」を見て、その後の農民文学への傾倒を、「自分の知識人性への批判」から、庶民の実感を重視する方向への転向があった、という風にまとめているんですけど、これでは「死んだ真似」をせざるをえなかった「銃口」の存在が見えていません。戦後も社会主義文学者として、また農業運動の指導者として活躍するわけですから、わりと一貫して農民の立場から農業政策を批判する、というスタンスは変わっていないと思います。作家、議員立候補、雑誌編集、などなど、活動の仕方がその時々でいろいろあるとはいえそうですけれど。

・戦時末期の鶴田

戦時体制への批判的な意図が見えるのはこの頃までです。政府による農民のための給付金を着服する村の旦那を殺してしまう話（戯曲「春」）や、新人が電話局での汚職をまのあたりにする、なんていう社会問題を題材にした話（「若い監視員」）が一九三九年に書かれているのが最後で、あとは故郷の話を書いたり、叔父との狩猟の話を書いたもの、そして文芸文庫にあるような北海道ものの作品を多く書くようになります。そして時代が下るにつれてどんどん翼賛文学的な要

素が強くなっていきます。

この頃、一九四〇年には出版用紙の割り当てが国の管理下におかれます。四三年には出版社の整理が行われて、書籍・雑誌出版社が、ともに十分の一に減らされます。

この頃の鶴田は実は非常に多作な時期に当たっていて、一九四二年には書き下ろしも含めて四冊出しているんです。北方農業ものが二冊、狩猟体験を中心にしたのが一冊、そして「隣組」を好意的に描いた長篇が一冊、です。

「隣組」の長篇は『神々の日』という題で、日本人の元をたどれば神代にはみな神だった、というようなことから来たものだと思われまして、内容もちろん、東亜新秩序を期待し、称揚するものなんですけれども、プロレタリア作家が書いたものと思って読むと、色々面白くもあります。これを機会にいろいろな改革への夢を語ったり、隣組は上意下達の組織としてよくできているけれども、下の意見を上へ伝える制度も整備しなければならない、というような主張があります。農民の苦難を前提にした米中心の農業は英米由来の観念だから改めなくてはならない、といったように、米英批判をかぶせることで農政批判を行っているあたり面白いんです。ひとつ面白かったのは、登場人物の台詞に次のようなものがあるんですね。

「若し仮りに、大東亜戦争が、米英の領土を奪ってそれを米英流の旧式観念で支配するための戦いだったら、勿論日本は、断じてそんな不正な戦いを始めはしないが、仮りにそうだとしたら、如何な日本でも決して勝ちはしない。」

表向きは勝っているからそうじゃない、という意味なんですけれど、これはとても皮肉な意味に聞こえますね。わかってて書いたんじゃないか。ですけれども、この作品、戦後に再版しようと申請したらGHQに発行禁止されて、紙型が没収されてしまいます。さすがに翼賛要素が強すぎました。他に、『家庭の幸福』という長篇があって、こちらは戦後数カ所の訂正で再版を許されたものがありますので、これの戦前版と戦後版との修正箇所を比較したものがありますので、配付資料をご覧ください。細かい所ですけど、こういうところを検閲したわけです。

GHQ検閲は、戦前の日本の×で伏字にするものと違って、検閲の後を残さないようにする方式ですので、駄目な箇所には同じ文字数で別の言葉を入れなければならない。だから、チェック箇所が多すぎて修正できないとなると、発禁ではな

いけれども発行をあきらめる、ということがあったようです。紙型、というものを使っていたので、これだと修正が多すぎると難しかったようですね。なんですけれども敗戦直後に再版された『若き日』では、削除個所がただ真っ白になっています。印刷ミスも考えましたけれども、内容的に明らかに満洲進出について書かれた所だろうと推測できる個所なので、検閲された部分でしょう。この本は戦前の検閲されていないものが国会図書館に所蔵されていません。

3 翼賛文学へ

・敗北から希望へ

ちょっと話が進みすぎてしまいましたけれども、少し戻します。芥川賞受賞の賞金で鶴田は北海道をもう一度訪問しまして、いろいろ調べてきたようで、この頃から酪農文学を本格的に展開しはじめます。文芸文庫収録作品はそうでもないですけれど、北海道旅行の後に書かれた作品には特に長篇で、酪農の議論を具体的に展開しているものがたくさんあります。

また、この時期の作品は特に敗残者や隠遁した人をメインにすえることが非常に多い。根室の僻地で活動する医師を書いた「カツケンの聖者」という短篇や、「ピリカベツの駆通」や「ナンマッカの大男」などは特に顕著ですけれど、「ピンニラ物語」やその長篇版の『北方の道』では、誰も来られない崖下に家を構える男と、山羊による酪農を進める医者との交流が書かれますし、左翼運動に挫折して親元にもどってくる人物、というのが複数の作品に出てきます。更科源蔵に会いに行っただけで、予備検束にそなえて彼は家を留守にしていた、という短篇「摩周湖」というものもあります。「ピリカベツの駆通」の瀬沼は、資本家に刃を向けて出所した後、という設定が語られますけれど、ここに見られるように、資本や権力への抵抗とそれが挫折した後、という空気がとても強く感じられます。「コシャマイン記」ともども、この時期鶴田は一貫して挫折の後の空気を書き続けていたようにも思います。

そして、一九三九年以降に書かれる酪農ものの長篇中篇は、どれも展開が似ています。外から来た主人公が北海道で酪農を進めようとするさまを見て、そこに自分のやるべきこと、将来を見付ける、というプロットがだいたい共通しています。挫折の後に、酪農に希望を見出した鶴田がそこに投影されていると見るのは引きつけすぎかも知れませんが、ただ、これは鶴田の若いころの北海道体験も

反映されているとみるべきでしょう。『若き日』という、学生が友人と一緒に北海道へ旅する、という作品はことにそうだと思います。

・「北」と帝国主義

この酪農文学ですけど、鶴田が酪農を主張する理由はいくつかあります。毎日収穫できる牛乳が農民の健康に役立つし、定期的な収入になること。牛は食べた飼料を糞として土に返すので、高価な化学肥料に頼らずにいられること、牛の飼料は寒い所でも育てられるので北海道に向いているとか、いろいろあります。つまり、酪農は北方の寒い地域に適した農業、だという点で日本の古来の南方的水田農業と違う、ということですね。北海道農民は上からの南方農業を拒否して酪農を立ち上げたのが偉い、と鶴田はしきりに賞賛します。

そして、一九三九年以降、鶴田は以下のように酪農の価値を説くようになります。

「それは単に、一地方の農業開発の成功としてではなく、民族発展のためには、日本民族が越え難きその胸中の万里の長城たる南方的性格をも見事に克服し得るとの実証を示したものとして、最も重大な意義をもつのであります。

即ち、今日最も強く要請されている満洲農業開発の如きも、わが民族が北方的自然の中において新天地開発の処女的経験を積んだ半世紀の辛酸のあとに学ぶところによってのみ、成功の鍵を握るのであります。」

つまり、日本民族の北方展開のために、酪農の経験に学ぶべきだというわけです。そしてこれを天皇の威光に答える道筋の確立だと述べる時、植民地主義、帝国主義的拡大志向への完全な同調になってしまっているのです。北海道は満洲という新しい「北」への進出の拠点として位置づけ直されます。

「コシャマイン記」から三年で、こうした発言をするようになってしまうわけですね。この時期の鶴田の発言はどこまで本心なのか、よくわからないところがあります。戦後も、この時期の発言については特に言及している文章というのを見た事はありません。重要な資料の回想記でも、プロレタリア作家としての活動初期までしか書かれておらず、戦時下のこの時期の鶴田自身の認識がどうだったか、というのは私には結局分かりませんでした。

・『土の英雄』

植民地主義への荷担にとどまらず、この後の鶴田はいよいよ翼賛文学的な要素を強めていきます。

一九四四年という時期に、『土の英雄』という長篇が書かれています。元々は児童文学として書かれたものを、五〇〇ページ近い少年小説としてリライトしたものです。鶴田作品中、なぜかこれだけ国会図書館のデジタル化資料（近代デジタルライブラリ）で、許諾を受けてインターネット公開されています。

ワッカピラ、というアイヌ語の名前が付いた村で、父が出征してしまった家族を助けて農業に勤しむ少年が主人公です。勇吉君は、父の意志として酪農をはじめをすることを目的としていて、酪農論の師匠のような人や村人たちとの交流を通じて、その目的を達成するまでの話になっています。

冒頭で校長の訓辞があって、そこでは今日卒業する生徒達は「部落を立派にするという戦争に、本日出征するのであります」と締められていて、国のため、村のため、少年の卒業すらも戦争の一部だ、という戦時下の論理が一貫しています。

作品が前提にしている論理として、既に国民と国家の同一視があるわけです。これもプロレタリア作家だった作家の作品としては驚くべきものがありますね。階級の対立というものが全く消されています。

さらに恐ろしいのは勇吉君の酪農の師匠がいう以下のような台詞です。

「日本の周囲をぐるっと見わたすと、東西南北に空地が多い。隆々としてふえる日本人を、いくらでも入れることが出来るわけだ。

然るにどうだ、そんな空地を、勝手に自分のものだといって縄を張り、日本人を入れまいとする国々がある。多くの空地は、草や木がぼうぼうと生えて、いろんな獣物のすみかとなっているだけだ。欲の深い国々は、空地に日本人を入れるより、獣物を遊ばせておいた方がいいと考えている。

（中略）

何れは、濠州はもちろん、外の空地へ出かけていって、そこを人類の繁栄と幸福のために開いてやらなければならない。盟邦満洲は、すでに日本の移民をよここんで迎えてくれている。」

日本の周囲には誰も住んでいない空地がたくさんあるのに、誰も其処に日本人を入れさせようとしない、というのはさすがにびっくりします。先住民族が獣あつかいされているとも取れるこの主張は、侵略の積極的肯定としか言えません。

このような論理を前提にしつつ、勇吉少年は「銃後は戦場だ。農業は戦闘だ。そして農夫は兵隊だ」、というスローガンのなかで、一人の兵士としての自分を見出すわけです。

そこで重要なのが、この勇吉少年の夢を叶え、彼の成長のメルクマールとなるのは、村を襲う害獣の熊を退治するイベントなんですね。村のみんなの協力の下で、熊を追い込み、少年の銃撃によって退治した熊の皮を売って、勇吉君は牛を飼うという悲願を達成します。「土の英雄」になるわけですね。

アイヌ文化は熊と関係が深いわけですが、彼が撃ち殺す熊に、コシャマインの姿が重なっているように見えて仕方がない。獣を打ち倒す英雄勇吉君は、コシャマインを裏切った和人の労働者そのものにも見えてきます。「コシャマイン記」と「土の英雄」は裏返しの関係になっているとも言えます。

そして「土の英雄」の舞台はワッカピラというアイヌ語の名前を持っているんですね。皮肉です。

また、叙事詩的文体の第一作「ベンケル物語」は、強大な熊を倒すべきなのに、まったく団結できない、という話でした。これもまた「土の英雄」の裏返しのようになっています。この関係は非常に興味深いものがあります。

植民地開拓の犠牲になったアイヌの民族的悲劇を描いた鶴田知也が、その十年後には国外侵略の積極的肯定をするようになってしまう。「闇の怒」「コシャマイン記」では、和人や資本家の裏切り行為を卑劣なものとして描いていたのにもかかわらず、鶴田自身は自分自身の作品をこうして裏切らなければならなかった。戦時下を作家として生きるという事の難しさが見えてきます。

・アッツ島

同じ年にアッツ島玉砕を題材にした『アッツ島』という長篇が出ています。初版二万部というそれまでの鶴田の著作の倍以上の初版部数で、出版が切りつめられていた時期にしては破格の部数だと思われます。

しかし、一応戦意高揚のために書かれたと思われるのに、じっさいの玉砕の場面を書いた八章ほどが発表を差し止められて、新聞記事やアメリカの報道などが翻訳されて載っています。わけのわからない顛末ですね。

で、じつはこの作品にも先住民族問題があって、アッツ島にはアリユート人という少数の先住民族がいました。作中では手厚く扱ったと書かれていて、その待遇は米軍よりもよかった、と自軍を持ち上げています。本当はそこで捕虜にされたアリユート人は北海道の小樽市若竹町に連行、抑留されています。栄養状態の変化などから半分くらいが死んでしまうという目に遭っていて、これにはアメリカやアリユート人から人体実験説、強制労働説、虐待説がでているそうなんですけれど、実地調査では意図的な虐待は確認できなかった、という結果になっています。

この件に関しては、スチュアート・ヘンリによる二つの論文、「昭和十七年小樽・四十名のアリユート人」、「諸君！」一九八〇年十月と、「アリユート民族と戦後補償——歴史に隠された連行事件」、「法学セミナー」一九九七年九月とを参照してください。

4 戦後の鶴田知也

以上が大まか戦前の鶴田の活動でした。この時期は雑誌図書の刊行が激減していて、仕事もなかったからでしょう、伊藤永之介といっしょに秋田に疎開しています。それが戦後も続いて、五年ほど秋田に滞在し、酪農の講演などに奔走するようになります。小説も、秋田を舞台にするものが書かれるようになります。

それが高じて、秋田で衆議院議員として二度立候補、いずれも落選、横手市長選挙にも立候補して落選と政治活動もやりながら、文学団体の結成や雑誌編集、また、小学館の児童雑誌にたくさんの児童文学を書いています。五〇年代あたりはかなり書いています。それが小学館児童文学賞を受賞した「ハッタラはわが故郷」などに結実します。しかし、この時期に書いていた一般小説はまったく単行本になりませんでした。一九七〇年、作家活動から引いていた時期に出された『鶴田知也作品集』に、かろうじて三〇〇ページほど収録されているのが唯一で、鶴田が書いていた雑誌はマイナーなものも多く、国会図書館にもないものがあります。

戦後の活動を追うのはそうした意味でもかなり難しいですね。小正路さんの研究が唯一だと思われます。小正路さんは戦後の小説作品を丁寧に分類して、農業問題とのかかわりを論じています。鶴田の戦後はほぼこれでカバーできると思います。

・戦後のアイヌ短篇

じつはこのころ、雑誌にアイヌものの小説を書いている、ということをエッセイに書いていたんですけど、発表されずにおわったものがあります。二〇〇九年に小正路さんがその草稿を発見してちょっとしたニュースになりました。これは武田泰淳の『森と湖のまつり』でのアイヌ観に対抗して書かれたものではないか、と小正路さんは推測しています。

鶴田のアイヌ小説はこれだけではないんですね。戦後に、ふたつあるんです。新人物往来社、という歴史物で有名な出版社がありますけれども、そこから出ていた「人物往来 歴史読本」という雑誌に、鶴田はアイヌものの読物めいた短い作品を二つ書いています。ひとつは、「コシャマインの戦い」を題材にして、武田信広とコシャマインのあいだにチャレンカ、というコシャマインの妹をおいて、チャレンカと武田信広の悲恋を書いたもので、ロマンチックな作品です。もうひとつは、「アイヌ清左工門の入牢」というものです。アイヌを鎮圧して蠣崎氏となった武田信広のようになりたいとチャンスを求めて北海道にきた清左工門ですけど、和人に虐待されるアイヌを見て、和人と喧嘩してしまうんですね。それで牢に入れられるんですけど、アイヌの人々が清左工門を助けに来る。それに恩を感じて髭を伸ばしてアイヌとして生きていこうと決意する、という話です。単純な人情話、ともいえますけれど、鶴田の作品歴を知っていると、非常に意味深に見えてきます。抑圧する側に荷担してきた鶴田の自己批判の意味を見てしまうのは読み込みすぎ、でしょうか。

で、じつは鶴田の作品には歴史や過去を舞台にしたものでなければアイヌは直接でてきません。アイヌ地名はしきりに出て来るのに、当時のアイヌは出て来ないんです。ユーラップコタンでイコトルと会ったように、鶴田の周囲にアイヌがいなかったわけでもないのに、なぜか鶴田作品にはアイヌがいません。抑圧者側にいるという自覚がアイヌを避けさせたのかもしれませんが。

・戦後活動

戦後は、五〇年代の創作のピークを越えて、六〇年代からは農業雑誌の編集長や農業運動の指導者としての活動に専念するようになっていきます。七〇年代は雑誌の穴埋めからはじめた草木画の仕事がふえ、画文集がたくさん出されます。そうして八八年に亡くなるまで、小説家としては活動しませんでした。

戦後の鶴田は一貫して農民、農業の立場から活動していたわけで、それが農民文

学なのか、農業運動なのかの違いはあっても、一貫してはいました。そうした活動から引退してからは、草木を描いたり、紀行文を書いたり、自然を直接の対象とした芸術へとむかいます。これはこれで、北海道の自然を体験したことから直接繋がっているのかも知れません。

戦後の農民文学には、明るい調子のもが多く、作者の主張がそのまま書かれているようなものもありますけれど、若い者への希望を語る、その希望は、おそらくは本心からのものだろうと思います。

・近代の経験 まとめとして

鶴田にとっては「北」というものは非常に重要な意味を持っていました。彼自身の個人的な体験としてもそうですし、農業に見られる日本の「南方的性格」へのオルタナティブとしての酪農や、アイヌという虐げられた民族の存在は、民族的偏見や階級といった構図を批判する契機でもありました。しかし、戦時下の統制が進んでいくと、そうした批判的機能は失われ、北方進出のための前線基地のようなものとして意味づけ直されることになりました。戦前日本の北海道の運命がここにありました。

沖縄と並ぶ日本の内国植民地として、北海道は近代国民国家形成にまつわる問題が凝縮して現われる場所でもありました。開拓の中で切り開かれた山林や原野は、近代的土地整備の制度の中で、アイヌから奪われたものです。開拓農民の立場に立つならば、それはアイヌの土地を奪った事を前提にしなければならず、アイヌの蜂起を描く事は日本の近代化政策への批判を示唆する事になります。近代化の表と裏として、これは同じ事態を逆から眺めているということです。鶴田知也はこの両方の立場を不安定に行き来することになりましたけれども、和人の鶴田にとって、このどちらかの視点に安住するということはできなかったわけです。プロレタリア作家として農民側に立ったとしても、アイヌという犠牲者が見え隠れし、和人としてアイヌ側に立ちつづけることもできず、そうした批判的態度を戦時下で維持する事は不可能でした。

そして、北を自分自身の文学の核にすえていたからこそ、戦時下の進行の中で、自分を自分で裏切る皮肉な運命を生きざるを得ませんでした。近代北海道のさまざまな矛盾をまさにその身に生きてしまった、というこの戦時下の経験は、いまなお、読み返されるべきではないか、と思います。

※公開にあたって

本稿は、「SF 乱学講座」の口頭発表用に用意した原稿を元にしたものです。実際に話した内容とは異なりますし、随所に岡和田氏による補足や参加者による質問などもありましたが、ここには反映されていません。

また、本稿は寿郎社から刊行予定の『北の想像力（仮）』に収録される「裏切り者と英雄のテーマ 鶴田知也「コシャマイン記」とその前後」を口頭発表用にリライトした以外はほぼ同じ内容となっております。ただし、元原稿にあった九十を超える大量の注釈はすべてカットしてありますので、詳しい出典、典拠等はそちらを参照してください。

——主要参考文献

鶴田知也『コシャマイン記・ペロニカ物語』講談社文芸文庫 二〇〇九

鶴田知也『鶴田知也作品集』新時代社 一九七〇

『プロレタリア文学集 1 1 文芸戦線作家集（二）』新日本出版社 一九八五

鶴田知也『土の英雄』大雅堂 一九四四（同年健文社より出版されたものの再刊）

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168000>

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168000>

鶴田知也『等閑記』「農業・農民」連載・一九七二—一九七七

その他鶴田の著作は省略

●本稿で論じたような鶴田の作品の流れを追うには、全体的な代表作を集めた『鶴田知也作品集』、プロレタリア作家時代の代表作を集めた『プロレタリア文学集 1 1』、そして翼賛期作品の代表としてインターネット公開されている『土の英雄』を見て頂ければよいと思います。文芸文庫は一作以外すべて『作品集』と収録作品が被っていますけれど、現行で唯一新刊入手が可能な著作というのと、年譜と解説が重要なので、その点から参照頂ければと思います。

小正路淑泰「鶴田知也『コシャマイン記』断章」「部落解放」二〇〇九年七月号

小正路淑泰「鶴田知也と戦後農業問題——酪農・開拓・共同経営・農民文学——」

「社会文学」第32号。

●戦後農業問題に関する論文は戦後の鶴田の活動を概観した唯一の文献で、非常

に重要です。

山口邦子『戦中戦後の出版と桜井書店 作家からの手紙・企業整備・GHQ検閲
作家からの手紙・企業整備・GHQ検閲』慧文社 二〇〇七

多岐祐介『文学の旧街道 作家論』旺史社 二〇〇二

上笙一郎『植民地児童文学史稿』、『日本古書通信』二〇〇八年一月～連載中

和田謹吾『風土のなかの文学』北書房 一九六五

●桜井書店店主の親族に当たる山口氏の著作は、桜井氏に宛てた鶴田の書簡などが引用されており、貴重です。

平野謙『平野謙全集 第三巻』新潮社 一九七五

井上ひさし、小森陽一編著『座談会 昭和文学史 第一巻』集英社 二〇〇三

中川裕『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー 一九九七

八雲町史編さん委員会『改訂 八雲町史』八雲町役場 一九八四

（同書は『デジタル八雲町史』として八雲町ウェブサイトで公開されている
<http://www2.town.yakumo.hokkaido.jp/history/>）